資料紹介

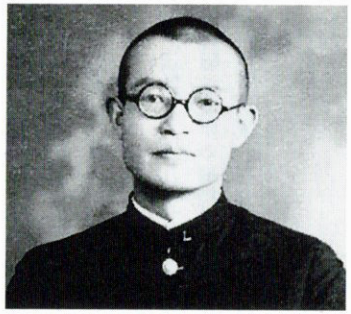
三田循司と太宰治

——太宰治全集未収葉書六通の紹介を中心に——

山内祥史

Ⅰ　三田循司の太宰治宅訪問と三田循司宛太宰治葉書

戸石泰一「青春」（『太宰治研究』筑摩書房、一九五六年六月三〇日付発行）によれば、彼は、一九四〇（昭和一五）年の「十一月末」太宰治に「おたずねしたい」ということだけを簡単に書いた「手紙」を出した。「二三日して」「返事がき」て、「そのままずぐ二度目の手紙を書いた」という。

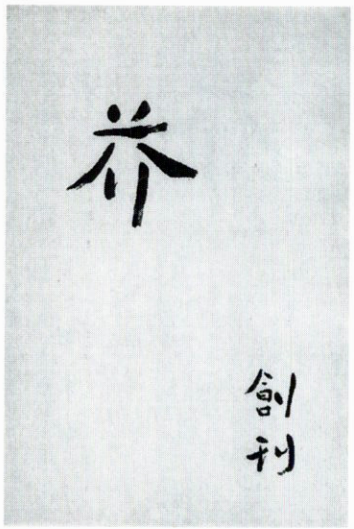


大学時代の三田循司

そのままの興奮を持つて、私は、高校以来一年上級の、詩を書いていた友人、三田の下宿に行つた。最初、太宰さんに手紙を書いた時も、私は、三田に報告したが、この夜は、三田と太宰さんを語つてつきなかつた。

三田循司は、一九一七（大正六）年九月一七日、岩手県稗貫郡花巻町一日市町四九番地の生まれで、当時数え年二四歳。「花巻」は、宮沢賢治の生育地であった。三田循司は、宮沢賢治の詩に関心を持って研究をし、弟三田恕（せい）に賢治全集を入手したいと打診したりしている。戸石泰一は、一九一九（大正八）年一月二八日、宮城県仙台市石垣町三番地の生まれで、当時数え年二二歳。三田循司と戸石泰一は、官立第二高等学校文科甲類、東京帝国大学文学部国文学科の「一年上級」と下級との間柄であった。一九三九（昭和一四）年一月、二人は宮澤皓らと企画し「一年程」

の「陣痛時代」を経て、同人雑誌「芥」創刊を「昭和十五年三月五日発行」している。森田實歳「太宰さんの思い出」（『太宰治研究3』和泉書院、一九九六年七月一五日付発行）によれば、「「芥」は戸石泰一が中心に、かれの中学の同窓で、いまは早稲田に在学しているものも交え、二高出身の東大在学中の法・文・経の文学愛好者を糾合し」て出された雑誌だという。「発行兼編輯者　宮澤皓　東京市杉並区方南町六七」「印刷所　東海林活版所　仙台市南町四十六番地」「発行所　芥発行所　東京市杉並区方南町六七」。「同人」は（イロハ順）で「逸見舜之助　戸石泰一　虎石宗雄　渡邊均　貝山悟　高橋新伍　齋藤孝次　目黒寛　三田循司　宮澤皓　森田實歳」の一一名。「創刊」の「目次」を示すと、つぎのようになる。



「芥」創刊

詩二篇　三田　循司　2～5
風の日　2～3
冷い夜　4～5
川端康成氏の文学　渡邊　均　6～11
哀歓修羅　宮澤　皓　12～21
注射　貝山　悟　22～34
意馬心猿　戸石　泰一　35～47
編輯後記　48

大学入学後、三田循司は「本郷区向ケ丘彌生町三　鈴木館」に、戸石泰一は「本郷区森川町一二〇　石田方」に下宿した。鬼原宏太「追想戸石泰一　幼友達」（「展」創刊第一号「特集戸石泰一」一九八〇年一二月三〇日付発行）に、つぎのような言説がある。

昭和十五年、八王子日野から私はよく本郷、森川町の彼の下宿を訪ねた。「芥（アクタ）」の同人が屯（たむろ）していた。戦死された三田循司の顔も見え、うすやみの中から文字をまさぐる蒼白な姿を記憶している。

「芥」第2号

「芥」第二号は「昭和十五年十月二十五日発行」。「印刷所　宇都宮市石町八八二番地　弘明館印刷所」の他は「創刊」と同じ。「目次」を示すと、つぎのようになる。

夕暮　三田　循司　2～3
ものろをぐ　三田　循司　4～5
彼と千鶴と　戸石　泰　6～22
へんろ日記　森田　實歳　23～38
文楽の人形を観る　宮澤　皓　39～57
後記　58

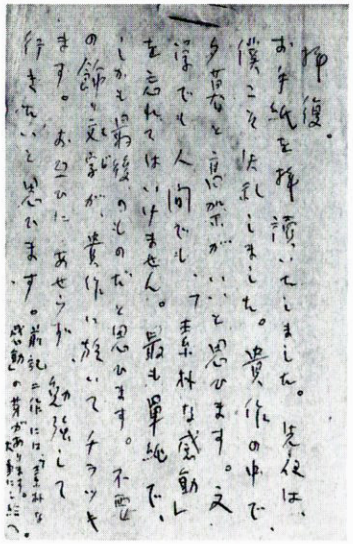
三田循司と戸石泰一とが三鷹に向かった時には、「芥」創刊と第二号とが持参されていたであろう。「第二高等学校尚志会」発行の尚志会雑誌「尚志」第一六八号（一九三八年二月二七日付発行）には「永劫の絶望」「鉄獄」、「尚志」第一六九号（一九三八年六月二七日付発行）には「愚人の覚醒」「断章」、「尚志」第一七〇号（一九三四年二月二七日付発行）には「冬の夜」「神経」などの三田循司の詩が掲載されているが、これら「尚志」は、持参されなかったように思う。

三鷹の「路地の奥」の「津島修治」その左に括弧して「太宰治」とある「やや古ぼけた標札」のかかった「小さな家」を、二人が訪れたのは、一九四〇（昭和一五）年一二月一三日であったようだ。戸石泰一の「日記」の「十二月十四日の項」には、つぎのような言説があるという。

昨日、満月なり。
昨日太宰治氏を三田兄と訪問す。
感激の極なり

戸石泰一によれば「牛后にたずね、夜になったのでした」（一九七八年六月二九日付山内祥史宛封書）という。その「夜」は、陰暦仲冬の十五夜であった。三田循司は、一二月一四日以降に太宰治宛、一三日訪問時の礼をも認め

た「手紙」を出したようだ。一九四〇年一二月一八日付、消印の「府下三鷹町下連雀一一三　太宰治」発信、「本郷区向ケ丘彌生町三　鈴木館内　三田循司様」宛の、つぎのような文面の葉書が、二〇〇九年七月下旬に発見され、日本現代詩歌文学館での「太宰治生誕一〇〇年　三田循司資料特別公開記念」に発行された『三田循司詩抄　太宰治短篇「散華」』（二〇〇九年一〇月一日付発行）に、覆刻されている。



1940年12月18日付

拝復。
お手紙を拝読いたしました。先夜は、僕こそ　失礼しました。貴作の中で、夕暮と高架が　いいと思ひます。

文学でも　人間でも、「素朴な感動」を忘れてはいけません。最も単純で、しかも最後のものだ　と思ひます。不要の飾り文字が、貴作に於いてチラツキます。お互ひに　あせらず、勉強して　行きたいと思ひます。大事にし給へ。
前記二作には「素朴な感動」の芽があります。

この葉書は、「日記風大学ノート」に添付されていたという。葉書の添付されていた「12／18（月）」の頁には、つぎのような三田循司の感想も見られる。

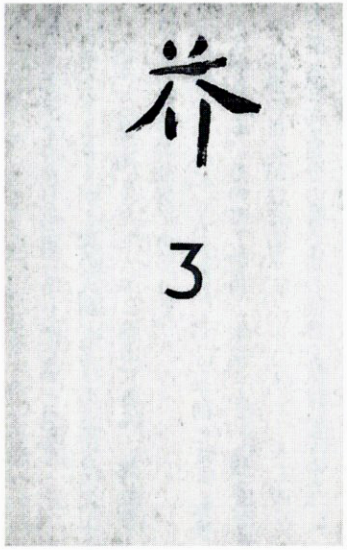
太宰さんから返信。ありがたいと思ふ。
そして　さすが　俺の人間と文学の急所をついてゐる、「素朴な感動」　たしかに　忘れてゐる、俺に限らず、インテリの通弊であらうが。
今俺がこゝに　人間的にも、文学的にも　転換をしつゝある、その時　結局　素地となり、糧となるのは　素朴な人間性である、
夙に、自分の愛心情の浅薄を気付いてゐた、
その愛と　素朴な感動する心と　帰する所は同じものであらう
そこが回換のmomentの様に考へられて来てゐた

太宰治の葉書に「いいと思ひます」とある、「夕暮」「高架」は、共に同人雑誌「芥」に掲載されている。「夕暮」は、すでに紹介したように「芥」第二号に掲げられた。太宰治は、「十二月十三日」に持参された「芥」第二号によって、つぎの詩を読んだのであろう。

夕　暮

〈花束をお墓に捧げて一心に合
掌するさまはほんとうに美し
いかなしい地上のすがたの一
つだと思ふ〉
そのやうに人々よ、この夕暮の一
時を、しみじみと人のすがたをな
つかしみかなしみゆかう……
……飾窓（ショーウインドオ）に飾られたきれいな着
物や電気スタンドの光りをいゝな
あと思ひ、小さい店先に坐つてゐ
る老嫗から叮寧に煙草を買ひ、星
のやうに空にまたたく瞳を愛し、
チンチンと電車が通る窓に並んだ
人々のあたたかいしるえつと。

「高架」は、「昭和十六年三月十日発行」の「芥」第三号に掲げられた。「編輯兼発行人」などは、第二号と同じ。



「芥」3

「同人」に「門馬宙」が加わって、一二名となっている。「目次」を示すと、つぎのようになる。

詩三篇　三田　循司　2～7
水面　2～3
部屋　4～5
高架　6～7
彼と千鶴と（その2）　戸石　泰　8～28
秋から冬へ　虎石　宗雄　29～45
後記　46

「芥」第三号所載の「高架」末尾に「―15・11―」とあるから、太宰治は原稿によって、つぎの詩を読んだのであろう。

高架

ああ満天星空大いなるかな
闇の底に
人々の世界は一列に灯をともし
点滴された涙の如くちらばひ歩む人の姿よ
大都会の屋蓋を抜く高架の橋に
大都会の晦冥を縫ふ道程の一顆に立ちて
鬱屈するむらぎもの精気を喀（は）けば
ああその声の厳しさよその真摯さよ
闇々虚空に鍛へられて光を発し
厲しき精神を散華せり――
友を送りてこの高架の橋去りがたく
人間愛心の美しさに涙呑まんとす
星のふる夜
人の絶えたる路上

太宰治は、この「二作」には「素朴な感動」の「芽があります」という。この「二作」は、たとえば、「散華」（「新若人」第五巻第三号、一九四四年三月一日付発行）と同年の発表の「雪の夜の話」（「少女の友」第三七巻第五号、一九四四年五月一日付発行）に紹介された、あの「お話」を想起させる。「難破した水夫」が「燈台の窓縁にしがみつき」助けを求めようとしたが、「燈台守」の「一家団欒」を見て、これを乱すのを恐れて躊躇した途端、大波にさらわれて死んでしまった、という「お話」である。この話に通じるような、「素朴な感動の芽」があると思われる。

なお、「高架」の一〇行目には、森田實歳の「昭和十五、六年の太宰さん（2）」（「太宰治全集第5巻月報5」筑摩書房、一九九〇年二月二七日付発行）や「太宰さんの思い出」（前掲）に指摘されているように、「散華のことば」があって、「太宰の小説の題名」と「無縁ではないかも知れない。」「芥」第三号には、「（宮）」「（戸）」の署名のある「後記」が掲げられていて、その中にも「芥文学が花を咲かせないと」とか、「伸びて花を、咲かさん咲かさんと勉強したい」とか、「これから生れ出てくる新しい文学が、絢爛豪華の花を咲かすまでは何年かゝるか解らない」とか、「花を咲かす」という言葉が頻繁に見られ、「散華」の題名との関連に想いを馳せてしまう。

Ⅱ　三田循司の病気と三田循司宛太宰治葉書と「散華」の着想

戸石泰一の「青春」（前掲）には、「これから、私は、多い時は、月に二度も三度も、太宰さんをたずねるようになつた。」とあり、「「散華」の頃」（「太宰治全集第六巻月報6」筑摩書房、一九五六年三月二〇日付発行）にも、「私も三田も、昭和十五年の冬はじめて、三鷹に太宰さんをたずねて以来、一月に一度は必ず行った。」とある。また、森田實歳「昭和十五、六年の太宰さん（1）」（「太宰治全集第4巻月報4」筑摩書房、一九八九年一二月一五日付発行）に、つぎのような言説がある。

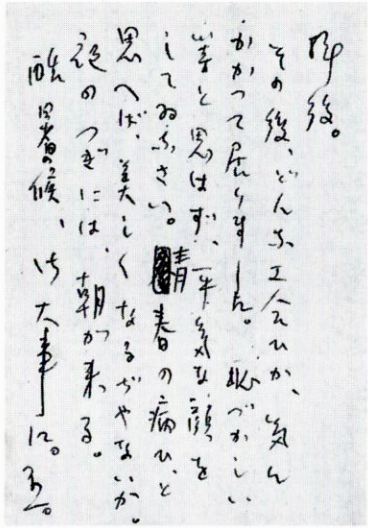
年があけて十六年の一月か二月のころであったと思う。太宰さんが和服にインバネスを着けて本郷にやってきた。

森川町の一つか二つ南寄りの通りにある金ボタンという飲み屋にいって、「芥」の同人と太宰さんが相対することになった。

そのあと、同席した「芥」同人の戸石泰一、渡邊均、虎石宗雄などと関わる想い出が述べられているが、森田實歳「太宰さんの思い出」（前掲）によれば、「三田循司は、このときいなかったと思う。」とある。

却説、二〇〇九年六月中旬、太宰治発信の三田循司宛四通と三田悊宛一通との、未公開葉書が発見された。これら葉書は、二〇〇九年六月一九日付発行の「盛岡タイムス」第一三七五一号の第一面トップに「太宰が友を励ます　本県出身の詩人三田循司の遺品から　赤澤さんが手紙5通見つける」という見出しで、葉書の写真と共に紹介され、二〇〇九年六月二〇日付発行の「岩手日報」第二五八八五号にも「太宰治の交友記す　未公開はがき見つかる　花巻の三田さん宅　小説登場、循司さんあて　循司さんの健康を気遣う」という見出しで、葉書の写真と共に紹介された。ついで、共同通信社盛岡支局の配信で、二〇〇九年六月二八日付発行の「産経新聞」第二三九一六号に「太宰治の直筆はがき発見　小説「散華」着想の元か　友人の実妹宅から5通」の見出しで、葉書の写真と共に紹介された他、全国の主要各紙に葉書写真と共に紹介記事が掲げられた。さらに、日本現代詩歌文学館編『三田循司詩抄　太宰治短編「散華」』（前掲）には、先の一通を含む新発見の太宰治葉書六通が、写真と共に紹介されている。そのうちのつぎの三通には、太宰治と三田循司との交流の情況が示されていて、興味深い。

第一は、一九四一年七月一一日付、七月一二日消印の「府下三鷹町下連雀　一一三　太宰治」発信、「本郷区向ケ丘彌生町三　鈴木館内　三田循司様」宛の、つぎのような文面の葉書である。



1941年7月11日付

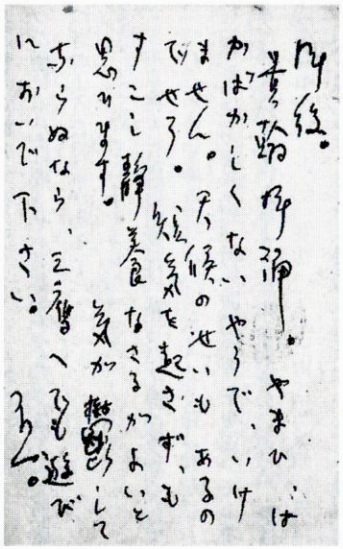
拝復。

その後、どんな工合ひか、気にかかつて居りました。恥づかしい等と思はず、平気な顔をしてゐなさい。青春の病ひ、と思へば、美しくなるぢやないか。夜のつぎには、朝が来る。

醒暑の候、御大事に。不一。

「夜のつぎには、朝が来る。」という言説は、キリスト教的発想の『聖書』の言説だ。「闇」の中に「光」が発生し、「夜の闇」が「朝の光」に転換するのである。

第二は、一九四一年八月三日付、八月四日消印の「府下三鷹町下連雀　一一三　太宰治」発信、「本郷区彌生町三　鈴木館　三田循司様」宛の、つぎのような文面の葉書である。



1941年8月3日付

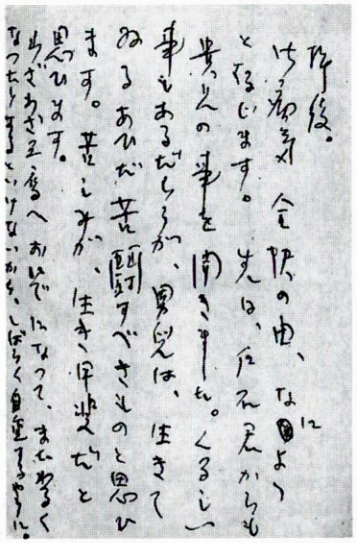
拝復。

貴翰拝誦。やまひ、はかばかしくない　やうで、いけません。天候のせいも　あるのでせう。短気を起さず、もすこし静養なさるがよいと思ひます。

なほ、気が滅入つて遊びにおいで下さい。

気が鬱してならぬなら、三鷹へでも遊びに　おいで下さい。　不一。

第三は、一九四一年九月二四日付、同日消印の「府下三鷹町下連雀　一一三　太宰治」発信、「本郷区彌生町三鈴木館　三田循司様」宛の、つぎのような文面の葉書である。



1941年９月24日付

拝復。
御病気　全快の由、なによりと存じます。先日、戸石君からも貴兄の事を聞きました。くるしい事もあるだらうが、男児は、生きてゐるあひだ苦闘すべきものと思ひます。苦しみが、生き甲斐だと思ひます。
わざわざ三鷹へ　おいで　になつて、またわるくなつたりするといけないから、しばらく自重するやうに。

これら一連の葉書には、すべて「拝復」とある。どのような便りを受け取っての、返信であったのか。「散華」につぎのような言説がある。

そのうちに三田君は、からだ工合ひを悪くして入院したやうである。
「とても、苦しい。何か激励の言葉を送つてよこして下さい」といふやうな意味の葉書を、再三、私は受け取つた。
けれども私は、「激励の言葉を」などと真正面から要求せられると、てれて、しどろもどろになるたちなのでその時にも「立派な言葉」を一つも送る事が出来ず頗ぶる微温的な返辞ばかり書いて出してゐた。

「三田君」が「入院した」というのは、太宰治の一連の葉書の文面や宛先に徴しても、私が戸石泰一から得ていた「病ひ」の実体についての教示（一九七八年七月九日付山

内祥史封書）に徴しても、妹三田綾子（当時数え年一三歳）が兄の「青春の病ひ」に関わる話として生母ウメ（当時数え年四四歳）から聞いたという記憶（二〇〇九年一〇月一四日付山内祥史宛三田四郎封書）に徴しても、「散華」での虚構と断じられる。しかし、「激励の言葉を」という「要求」は、あったのだろう。

ともかく、先の太宰治の一連の葉書によれば、三田循司は、一九四一年七月上旬「青春の病ひ」に罹って、一箇月後の八月上旬になっても「やまひ、はかばかしくない」情況が続き、二箇月過ぎた九月下旬、やっと「全快」したようである。これら一連の葉書を、二〇〇九年六月一八日、NHK盛岡放送局から送られてきたFAXで読んだ時、すぐさま想い浮かべたのが、「散華」冒頭の登場人物「三井君」であった。「散華」に、「三井は、からだに気をつけなけりや、いかんな、（略）からだを丈夫にして、それから小説でも何でも、好きな事を始めるやうに、君から強く言つてやつたらどうだらう」と「三井君の親友」に「私」が「たのんだ」ところ「それ以来、三井君は、私のところへ来なくなつた。」とあり、「私のところへ来なくなつて、三箇月か四箇月目に三井君は、死んだ。」とある。三田循司から「病気、全快」の便りを落手するまで、太宰治は、「やまひ、はかばかしくない」と報されて「不安」を感じ、彼の「死」の可能性さえも覚えることがあったのではないか。「散華」には、「からだが丈夫になつてから、三田君は、三田君の下宿のちかくの、山岸さんのお宅へ行つて、熱心に詩の勉強をはじめた様子であつた。」とあり、「私から離れて山岸さんのところへ行つた」とある。「三井君」と同様「私のところへ来なくなつた」のである。「散華」の「三井君」は、三田循司の「やまひ、はかばかしくない」時に覚えた「不安」を想起することによって、着想された人物ではないか。「三井君」と「三田君」とは、共に三田循司の生活歴を創造源としているのではないか。「三井」「三田」の「三」の字にも、それが暗示されているように思われる。北川透「文学の一兵卒―太宰治「散華」について」（「日本文学研究」第三四号、一九九九年一月二〇日付発行）に、つぎのような言説がある。

いったい病死する三井君には三田のようなモデルがあるのだろうか（略）わたしがそのモデルの実在を疑問に思うのは、三井君には三田君に付与されているような、出身地（あるいは居住地）、進学した高校や大学名、性格、風貌などの具体性が欠けているからである。

これは、「三井君」に関する言説の特徴を衝いた、秀れ

た指摘であった。また、鳥居邦朗「評伝　昭和十九年」（「国文学　解釈と鑑賞」第五八巻第六号、一九九三年六月一日付発行）にも、つぎのような言説がある。

玉砕した「三田君」について語る前に、肺結核で死んだ「三井君」の死の美しさをこのようにめんめんと語る意図は何なのか。少なくとも二人の死が等価なものとして並べられていることは確かである。それが美しき死として等価であるということは、玉砕死と病死との間に差はないということである。

そのあと、「雪の夜の話」の「難破した水夫」の「挿話」を紹介して、これを「散華」と重ねて「価値基準」を考察している。この指摘と、「散華」の題とから、想起される詩があった。一九五六（昭和三一）年春の作という、金井直の「散る日」と題した詩である。

さくらの花が散る　惜しげもなく己を捨てるすばらしさ
うれい顔がそれを眺める　いま見たときから散りはじめたようなはなやかさを
見ているあいだに散り果ててしまいそうな風情
こんなゆたかな心がどこにあろう　誰にも見られないうちから散っているのだ
そしてまた　落花に酔った者たちが去ったのちも
さいはてにむかって散りつづけているのだ

「散りつづけて」いる不変の「花」と、過去、現在、未来の時々に応じて「眺め」「見て」「酔った」という変化する「者たち」とを対比して、「惜しげもなく己を捨て」「散りつづけている」「花」の「すばらしさ」「はなやかさ」「ゆたかな心」を詠った詩である。「散華」の「三井君」も「三田君」も、「雪の夜の話」の「水夫」も、「己を捨て」「さいはてにむかって散りつづけ」たのではなかったか。「三井君」と「三田君」との「二人の死が等価」で、「玉砕死と病死との間に差はない」という指摘は、秀抜であった。「二人は共に、自己の「死」の可能性を見つめ、自己の有限性を積極的に意識している。「生」のただ中にあって、迫り来る「死」は、どのような意味を持つのか。免れ難い「死」の実感とその意識化こそが、自が「生」を真に意識化させ現実化させることになる。「死」の気付きは、人の注意を本来的自己へと差し向けることを可能にするのだ。

世俗的日常的観点を超える「生」の輝き、真の本来的自己に直面させるのである。

Ⅲ　三田循司の山岸外史への傾倒と入営と軍隊時代の葉書

戸石泰一の「青春」（前掲）には「私とはじめて太宰さんをたずねた三田は、その後、下宿が近かつたせいもあつて、太宰さんよりは、山岸さんをたずねることが多くなつていた」とあり、書簡（一九七八年七月九日付山内祥史宛封書）には「山岸さんと太宰さんとを同時に訪れたり、飲んだりしたのは、どうも三田と私だけのようです。」とあり、「「散華」の頃」（前掲）には「彼は、三年になると、急速に、太宰さんよりは、むしろ太宰さんを通じて紹介された、山岸外史さんに傾倒していつた。」とある。太宰治の「散華」にも、先に引用したつぎのような言説が見られる。

からだが丈夫になつてから、三田君は、三田君の下宿のちかくの、山岸さんのお宅へ行つて、熱心に詩の勉強をはじめた様子であつた。

山岸外史は、当時「本郷区駒込千駄木町五〇」に居住していた。「本郷区向ケ丘弥生町三　鈴木館」に下宿していた三田循司にとっては、「近かつたせいも」あって、山岸外史を「たずねることが多くなつて」いったのであろう。だが「三年にな」った、一九四一（昭和一六）年四月頃から、「急速に」山岸外史に「傾倒していつた」のは、山岸外史が、「飾り文字（もじ）」を「不要」とは感じない、感性の持主であったためのように思われる。森田實歳「太宰さんの思い出」（前掲）にも、つぎのような言説がある。

自分のところにきて、また離れていった三田を、（「散華」にはそう書いているが）、太宰が幾分こだわりをもってみたとしても、私は不思議はないと思う。聖書のジジモのトマのように、なかなかに信じがたい人間として、山岸外史の推賞する詩人としての三田を、そのままには受け容れ難いところがあったのも、ひとつにはそのこだわりもあったろうか。

「散華」にもつぎのような言説がある。

三田君は、私のところに来てゐた時分にも、その作品を私に二つ三つ見せてくれた事があつたのだけれども私はそんなに感心しなかつたのだ。戸石君は大いに感激して、

「こんどの三田さんの詩は、傑作ですよ。どうか、一つ、ゆつくり読んでみて下さい」

と、まるで自分が傑作を書いたみたいに騒ぐのであるが、私には、それほどの傑作とも思へなかつた。決して下品な詩ではなかつた。いやしい匂ひは、少しも無かつた。けれども私には、不満だつた。

私は、ほめなかつた。

「こんどの三田さんの詩は、傑作ですよ。」という「戸石君」の言葉は、「芥」第二号所載「後記」のうち「(T)」の署名のあるつぎの一節を踏まえた言説のように思われる。

本号も又、三田君の詩「夕暮」及び「ものろをぐ」は傑作である。君の詩境のますます高まつてくるのは、我々としても、大きな喜びであり、誇りでもある。が毎号、三田君にばかり讃辞を捧げなければならぬのは、実に残念である。早く、三田君のにまけぬものを書きたいと思つてゐる。

「散華」には、「私は、ほめなかつた。」のあと「しかし、私には、詩といふものがわからないのかも知れない。」とある。だが、「太宰治」に「詩といふものかわからな」かったとは思われない。拙稿「太宰治の「蒼穹答へず」」(「国文学　解釈と鑑賞」第五五巻第一一号、一九九〇年一一月一日付発行)で紹介した、小島一晃の詩集『天使魚』(赤塚書房、一九四〇年六月二〇日付発行)の「序文」に依るだけでも、彼の詩を鑑賞する能力の卓抜さが、納得できるだろう。

却説、一九四一(昭和一六)年一二月八日、太平洋戦争が勃発する。三田循司は、修業年限が三箇月繰上げ短縮されて、その月に東京帝国大学文学部国文学科を卒業した。三田恕「三冊の手帖」(「展」創刊第一号「特集戸石泰一」一九八〇年一二月三〇日付発行)につぎのような言説がある。

昭和十六年十二月、兄は繰上げ卒業で花巻に帰って来た。

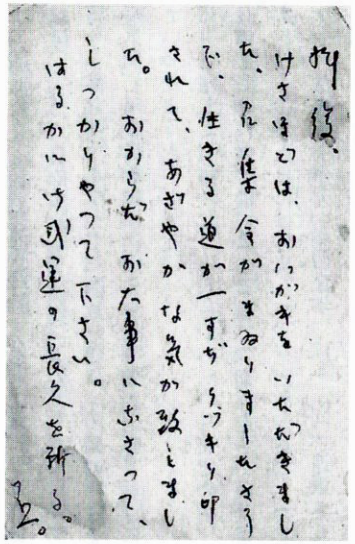
国立の中学校につとめる事になっており、四月には再び東京に戻るはずであった。

三田循司は、父勇治(当時数え年五三歳)母ウメ(当時数え年四五歳)と一緒に、一九四一(昭和一六)年一二月二七日夜東京を発って、小雪の散らつく花巻に帰ったようである。三月まで花巻で過ごす予定で、東京を発つ前に、

翌年四月から勤務する予定になっていた北多摩郡「国立の中学校」に挨拶に行き、その帰途三鷹の太宰治宅に立寄ったようだ。その時の印象を三田循司は、「何といふさびしさうな、のがれた姿だつたでせう」と回想している。

戸石泰一「玉砕」(「小説朝日」第二巻第一〇号、一九五二年九月一日付発行)によれば、「卒業と同時に臨時徴兵検査があり(略)結果、三田は第二乙種であつた」という。

一九四二(昭和一七)年一月二三日付、一月二六日消印「東京府三鷹町下連雀一一三　太宰治」発信、「岩手県花巻町一日市　三田循司様」宛の葉書には、つぎのような言説がある。



1942年1月23日付

拝復。

けさほどは、おハガキを　いただきました。召集令が　まゐりましたさうで、生きる道が一すぢ　クッキリ印されて、あざやかな気が致しました。おからだお大事になさつて、しつかりやつて下さい。

はるかに　御武運の長久を祈る。

不一。

「玉砕」(前掲)によれば、三田循司は、「二月一日盛岡の歩兵第百五連隊に入営させられ」たという。「三田循司と私は、旧制二高時代の同級生であ」ったという山田秀雄の「追想　三田循司　北の海」(「展」第二号、一九八一年九月一六日付発行)に、つぎのような言説がある。

戸石さんの「玉砕」という作品は、アッツ島の戦場と一等兵三田が描かれているが、私は三田の入隊した同じ部隊に三田から八ケ月おくれて入隊したことを知った。

入営後三田循司は、「北部第六十二部隊下村隊」に配属され、戸石泰一によれば「最下級の兵士」として軍隊生活を送ったようだ。一九四二(昭和一七)年三月、三田循司

は、「学生兵の幹部候補生試験」を受けた。三月五日筆記試験、三月六日口頭試験。試験の成績はよくなくて「落第」。「落ち幹」となって、四月一〇日「所属の中隊を」北部第六二部隊川瀬隊に「かえられ」て「玉砕要員」になっていったようだ。

一九四二（昭和一七）年八月から一〇月までの頃、三田循司と山岸外史とは、よく葉書での交信をしていたようである。一〇月五日には外出して、三田悊が持参した「赤門文学」二冊を入手。「赤門文学」に「三回」連載された山岸外史の「ロダン論」のうちの(一)(二)に当たる、「ロダン論―或ひは私の彫刻論―」（「赤門文学」第二巻第八・九号、一九四二年九月一日付発行）と「ロダン論（続き）」（「赤門文学」第二巻第一〇号、一九四二年一〇月一日付発行）とを読んで、山岸外史への傾倒を深めていったようだ。「赤門文学」第二巻第八・九号には、内海伸平「太宰治論」も掲載されていたが、三田循司がこれに目を通したか否かは不明である。

そののち、三田循司は、一九四二（昭和一七）年一〇月二六日、北海守備隊に転属を命ぜられて、一〇月三〇日に盛岡駅を、一一月三日に小樽を発ち、幌筵島柏原を経て、翌一九四三（昭和一八）年一月三一日アッツ島ホルツ湾に入港している。

三田悊「三冊の手帖」（前掲）によれば、三田循司は、「盛岡の軍隊生活中に、一冊書き上げては面会に行った私に手渡し（略）三冊目を手渡して、兄は盛岡を去った。」とある。この三田悊「三冊の手帖」の稿を読んだ雑誌「展」の「編集兼発行人及川道代」は、「三冊の手帖を紹介したいと願い」、「展」第二号（一九八一年九月一六日付発行）に「その一部を」掲げた。「河北新報」第三〇五三〇号（一九八一年八月一三日付発行）は、これを「「極烈に死ぬべく準備中」　世に出る戦死した若い兵士の詩集　仙台の出版社発表　切々、けがれない詩魂　花巻出身の三田循司　太宰に師事、創作志す」の見出しで紹介している。

却説、「散華」に、「「散華」といふ小説に取りかかつた（略）私の意図は、たつた一つしか無かつた。私は、最後の一通を受け取つた時の感動を書きたかつたのである。」とある。「任地に第一歩を印した時」の「最後の一通」は、「散華」にはつぎのような文面として掲げられている。

御元気ですか。
遠い空から御伺ひします。
無事、任地に着きました。
大いなる文学のために、
死んで下さい。
自分も死にます、

この戦争のために。

「死んで下さい、といふその三田君の一言が、私には、なんとも尊く、ありがたく、うれしくて、たまらなかつたのだ。」とある。ところが、森田實歳「太宰さんの思い出」（前掲）に指摘されているように、戸石泰一「玉砕」（前掲）には、つぎのような文面として掲げられている。

先生
死ンデ下サイ
文学ノタメニ
私モ
死ニマス
大イナル戦争ノタメニ

森田實歳「太宰さんの思い出」には、つぎのような言説がある。

戸石が太宰家から、その葉書を借覧したということを勘案して、多分後者が原文であろう。ということは、「先生」とみずから記すのをはじらったと、推し量るとしても、「散華」が実録ではなく創作であるということを、あらためて思い知らされるのである。しかし、こういう文章にまで、虚構を用いるということが、太宰の不誠実ではなくて、そのようにして作品が描けるという作家魂、根性に想いを到すべきなのであろう。

これに関連して、二〇〇九年六月中旬に発見された太宰治葉書について、六月二二日に共同通信社盛岡支局から求められて述べた私見の要旨が、同社配信の記事として、つぎのようにまとめられている。

「太宰と三田さんは今回の5通を含め書簡の往復があったとみられ、これらのやりとりから散華の着想を得たのでは」と指摘。「太宰は実体験と虚構を織り交ぜて小説を書いたとされ、太宰文学の研究に貴重な資料となる」と話している。

作品「散華」は、あくまで「言葉」による「創作」であることを、忘れてはなるまい。

Ⅳ　三田循司の「玉砕」と三田悊宛太宰治葉書

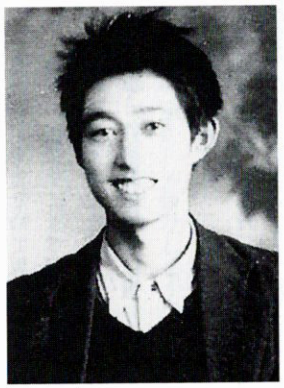
アッツ島での戦況については、戸石泰一「玉砕」（前掲）

に詳しい。この稿は、大東研究所編『報道1アッツ島血風録』（山海堂出版部、一九四三年七月一日付発行）、里村欣三「アッツ島挿話」（「現代」第二五巻第三号、一九四四年三月一日付発行）、鶴田知也著『アッツ島』（国民図書刊行会設立事務所、一九四四年六月二〇日付発行）などを参考に執筆されたのであろう。右遠俊郎「作品論・戸石泰一の特質と位置　初期短編について」（「群狼」第一二号「戸石泰一追悼特集号」一九七九年二月一五日付発行）に、つぎのような言説がある。

「玉砕」は、友人三田循司の死を悼む戸石泰一が、アッツ島で「玉砕」した友の最期を見とどけようとするかのように、その戦況および作戦経過、彼我の軍の優劣、移動の模様までを丹念に調査し、再現しようとしたものである。

「玉砕」発表の翌年には、伊藤二三男、伊勢田武美編『アッツ島　皇軍玉砕秘録』（華頂書房、一九五三年七月二五日付発行）も上梓されている。山田秀雄「追悼　三田循司　北の海」（前掲）によれば、「三田のアッツ島転属」を聞いて「三田に葉書をだした」ところ「返事がきたのには、びっくりした。／「米軍の砲撃はすごい、すごい。詩だ、小説だなどというもんじゃないよ……」といった文面だった。」とある。

三田循司のアッツ島での「玉砕」を太宰治が知ったのは、すでに拙稿「解題」（『太宰治全集第六巻』筑摩書房、一九九〇年四月二七日付発行）で紹介したように、「朝日新聞」第二〇六三二号、一九四三年八月二九日付発行での「原隊発表」によってであったようだ。「散華」にも、「アッツ玉砕」を報じた「新聞」で「三田循司といふ姓名を見つけ」たとある。「私は山岸さんに葉書を出した。」「三田君を偲ぶ為に何かよい御計画でもありましたならばお知らせ下さい。」「二、三日して、山岸さんから」葉書が来る。「自分は三田君の遺稿を整理して出版する計画を持つてゐる」「遺稿集の題は、「北極星」としたい気持です」と「したためられて」いた。「それから間もなく、山岸さんは、眼の



三田悊

大きな背の高い青年を連れて、三鷹の陋屋にやつて来た。「三田の弟さんだ」山岸さんに紹介されて、私たちは挨拶を交した。（略）私の家で、三人、遺稿集の事に就いて相談した。」とある。

先に紹介した、一九八一年八月一三日付発行「河北新報」第三〇五三〇号の記事にも、つぎのような言説があった。

山岸は、太宰が「散華」を発表した昭和十九年三月の直後、やはり三田を主人公にした二百五十枚の「北極星」をまとめたが、これは発禁処分になった。（略）三田は、遺族に軍隊時代に書いた三冊の小型手帳を残している。

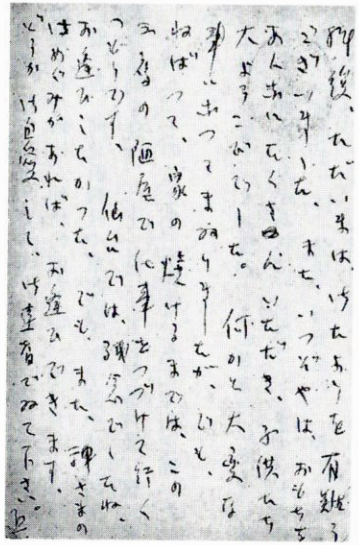
「河北新報」の調査によれば、「山岸の小説は」「三冊の小型手帳を」「素材にまとめられた」とのことである。

また、池内規行『評伝・山岸外史』（万有企画、一九八五年二月一五日付発行）所掲の「山岸外史年譜」の「昭和十九年（一九四四）」の項に、つぎのような言説がある。

八月、岩手県花巻に三田悊（三田循司の弟）を訪ね半月ほど逗留、読書に明け暮れる。

浦田敬三「岩手と文化人　太宰治と三田循司」（「盛岡タイムス」第一八九九号、一九七五年二月一三日付発行）にも、「山岸外史氏は昭和十九年八月十九日、三田循司詩集編纂のため来県、同日午後四時から県公会堂で座談会を開催と報じられている。」という言説がある。現在公表されている三田循司の詩は、日本現代詩歌文学館編『三田循司詩抄　太宰治短編「散華」』（前掲）に、すべてまとめられている。

先に紹介したように、二〇〇九年六月中旬、三田循司の弟宛葉書が発見された。一九四五年三月八日付、三月九日消印の「都下三鷹町下連雀一一三　太宰治」発信、「岩手県花巻町鍵町　三田悊様」宛の、つぎのような文面の葉書である。



1945年3月8日付

拝復、ただいまは、御たよりを　有難うございました、また、いつぞやは、おもちをあんなにたくさん　いただき、子供たち大よろこびでした。何かと　大変な事になつてまゐりましたが、でも、ねばつて、家の焼けるまでは、この　三鷹の陋屋で　仕事をつづけて行くつもりです、仙台では、残念でしたね、お逢ひしたかつた、でも、また、神さまの御めぐみがあれば、お逢ひできます、どうか　御自愛して、御達者でゐて下さい。不一、

三田恕は、三田循司のすぐ下の次男で、当時数え年二七歳。父勇治が営業していた映画館の仕事に携わっていた。当時地方の映画館営業者は経済的に豊かであったが、大都市周辺居住者の食糧事情は厳しかったようだ。「何かと大変な事になつて」とあるが、この葉書の消印の翌日の0時少し前から、東京都下はアメリカ空軍機B29約一五〇機の焼夷弾攻撃を受け、太宰治も「三鷹の陋屋で　仕事をつづけて行く」ことを断念、やがて甲府の美知子夫人の実家に疎開することになる。「仙台では、残念でしたね」というのは、太宰治が一九四四年一二月下旬、仙台を訪れた時に逢えなかったことをいっているのであろう。拙稿「年譜」（『太宰治全集別巻』筑摩書房、一九九二年四月二四日付発行）に記載しておいたように、太宰治は、「十二月二十日夜、魯迅が仙台医学専門学校に在籍した当時のことを調査するために、仙台に向かって、十二月二十一日朝仙台に着」き、河北新報社や東北帝大医学部や仙台の街などで調査活動を続け、「十二月二十五日朝仙台発、夜に帰宅」している。そのことを三田恕は、あとで伝え聞いたのであろう。

なお、注意すべき言説が、この葉書にはある。「また、神さまの御めぐみがあれば、お逢ひできます」とある言説の裡の「神さま」は、発想、言葉遣い、「神」に対する姿勢などから、キリスト教の「神」ではないか、ということだ。たとえば、「玉砕」の言葉から連想される「神国日本」というような場合の日本的な「神」とは、異なる「神」のような気がする。「三井君」「三田君」の「死」の評価に「神」が関わるとすれば、これは重要な問題であろう。「散華」で「三井君」の「臨終」を、「神のよほどの寵児だつたのではなかろうか」と評している言説の裡の「神」も含めて、慎重に検討されるべき問題と思われる。

〔付記〕引用は、すべて初出に依ったが、引用文中の旧字体の漢字は新字体に改めた。なお、この稿を草するに際し、三田四郎、三田綾子ご夫妻を始めとし、つぎの諸氏、諸社、諸館の助力を得た。記して謝意を表する。

赤澤征夫、安藤宏、西田あすか、船越英恵、水野敬子、岩手日報社、河北新報社盛岡支社、共同通信社盛岡支局、NHK盛岡放送局、盛岡タイムス社、岩手県立図書館、東北大学史料館、日本近代文学館、日本現代詩歌文学館、宮城県図書館、盛岡てがみ館。